「すきまど」から見える幸せ

白百合学園中学校　一年　鹿住　結和

私は、「間」と聞くと、「隙間」という言葉を連想する。

……いや、正確には、「すきまど」という言葉を連想する。

「すきまど」

他人が聞けば耳を疑うような不思議な言葉だと思うが、我が家では日常的に使われている。例えば、

「そのドアのすきまど閉めてくれる？」

「すきまどにホコリが溜まっちゃってるね」

といった感じだ。そう、「すきまど」は、我が家では「隙間」と同じ意味の言葉なのだ。

「すきまど」という言葉が我が家に登場したきっかけは、私の言い間違いだ。母によれば、私が言葉を覚え立ての頃、「隙間」を「すきまど」と言い間違えたことがあったそうだ。と言っても、当の本人である私は、そんな言い間違いをしたことなど全く覚えていない。改めて聞くと、我ながら可愛い間違え方をしたな、と少し笑えてしまう。

母も「すきまど」と聞き、面白いと思ったらしい。それ以来「すきまど」は、家の中だけの内輪ネタとして、我が家で日常的に使われる言葉になった。

ドアの隙間や、棚と壁の間の隙間。会話の中でそれらは、当たり前のように「すきまど」と呼ばれる。今や「すきまど」は、ずっと前から「すきまど」という言葉としてそこにあったかのように、違和感無く会話の中に溶け込んでいる。そして、「すきまど」という言葉が会話に出てくるたびに、共通の言葉を持っていることを確かめ合うかのように顔を見合わせ、そして笑い合う。そこにはいつも、温かい空気が流れている。

私は、「すきまど」という言葉が好きだ。「すきまど」と口にすると、どこか温かい気持ちになる。「すきまど」という言葉を聞くと、自然と口元が緩む。

私は、「すきまど」という言葉自体が好きなのではないのかもしれない。会話の中に出てくる「すきまど」という言葉に顔を見合わせて笑い合う、その温かい雰囲気が

好きなのかもしれない。

そこまで考え、ふと思った。

母が、私が小さい頃にした言い間違いを、本人はすっかり忘れているような些細なことを、覚えていてくれたということ。他愛無い会話の中のひとつの言葉に、顔を見合わせ笑い合えるということ。そこに流れる温かい空気を感じられるということ。

私は、いつも幸せの中にいるということだった。

体の中を、電流が走り抜けたようだった。

自分は恵まれていない、と思ったことは無いし、私は不幸だ、と嘆いたことも無い。けれど、それだけに、幸せをこんなにも強く実感したことが衝撃だった。

私は最近、家族に対してあまり素直になれない。意見がぶつかることも、言い争いが高じて怒鳴り合いになることも、よくある。

イライラして反抗することはあっても、他愛無い会話を大切にしたい。「すきまど」に顔を見合わせ笑い合う、その一瞬一瞬に感謝したい——そんなことを思った。

心の「すきまど」が、幸せで埋まったような気がした。